

語選択のゆれ：「な過ぎ」と「なさ過ぎ」の使用率

著者	黒? 佐仁子
雑誌名	聖学院大学論叢
巻	第32巻
号	第2号
ページ	93-108
発行年	2020-03-15
URL	http://doi.org/10.15052/00003721

語選択のゆれ ——「-な過ぎ」と「-なさ過ぎ」の使用率——

黒 崎 佐仁子

抄 録

本研究では、語の選択の「ゆれ」に焦点を当てる。否定辞「ない」に「過ぎ」が付いた複合語には「-な過ぎ」と「-なさ過ぎ」の二つの形がある。この「-な過ぎ」「-なさ過ぎ」の使用割合を国会会議録と東北地方および関西地方の府・県議会の会議録を用いて調査した。調査の結果、いずれの会議録でも、「な過ぎ」「なさ過ぎ」が使用されていた。ただし、会議録によって、使用割合には差があった。国会会議録では、「-な過ぎ」「-なさ過ぎ」の出現数は、ほぼ同数だった。それに対し、東北地方では「-な過ぎ」が多く、関西地方では「-なさ過ぎ」が多かった。つまり、地域によって「ゆれ」に差があることが明らかになった。

キーワード：複合語、ゆれ、地域差、硬い表現、否定形

序章 はじめに

「のちゃんのDO科学」という新聞掲載の子ども向け教育記事がある。2017年2月4日の朝刊に掲載された「大人になると骨の数は変わる？」⁽¹⁾には、「スポーツの「やり過ぎ」と「やらなさ過ぎ」の両方があるのよ。」「やらなさ過ぎは、家でゲームばかりして運動不足になることだね。」という表現があった。本稿が注目するのは、「やらなさ過ぎ」という表現である。「やる」は動詞だが、否定形「やらない」となった場合、イ形容詞と同様の活用をするため、「暑い」が「暑すぎる」となるように、「やらない」は「やらな過ぎる」となるはずである。しかしながら、公共性を持つ新聞の教育プロジェクト記事に「やらなさ過ぎる」が用いられている。つまり、この表現は誤用や乱れと認識されていないと考えることができる。言い換えると、「やらな過ぎ」と「やらなさ過ぎ」は、どちらも日常で使用されている「ゆれている言葉」であると言える。このような「ゆれ」に関しては、文科省や国立国語研究所が表記、発音、アクセント、語法等について数多くの調査報告を行っている。しかし、語法に関して言えば、内省の調査はあるが、実際の「ゆれ」が、どの程度の

使用率でゆれているのかまでは提示されていない。そこで、本稿では、ゆれている言葉の一例として、否定の接辞に「過ぎ」が付いた複合語を取り上げ、どの程度の割合で使用が分かれるのかを調査することにした。

第一章 「ゆれ」の定義

第20期国語審議会(1995)は、「新しい時代に応じた国語施策について(審議経過報告)」⁽²⁾の付記「言葉のゆれについて」で、次のように述べている。

ある語が変化する過程で、その語形等について、本来の形に対して拮抗する形が別に生じ、両者が並存する状態になったとき、これを言葉の「ゆれ」と言う。(中略)「ゆれ」は、当初はごく少数の誤用から生ずることも多い。本来の語形、意味・用法が大多数に支持され安定しているとき、新たに別語形等を用いることは、誤用とされる。その別語形等の使用者が増加し、ある程度支持されるようになった状態が、いわゆる「ゆれ」であると考えられる。

野田(2005)⁽³⁾は、「同じことを表現するのに複数の形があり、どの形を選ぶかが世代や個人や文脈などによって異なることがある。こういった現象を「ゆれ」と呼ぶ」(p.134)とし、さらに、「乱れ」と「ゆれ」の違いについて、「乱れ」と言うとき、標準的でない表現に対するマイナスの評価を表すが、「ゆれ」という表現にはプラスやマイナスの評価は含まれていない」(p.134)とする。

第20期国語審議会(1995)、野田(2005)のいずれも、ゆれている言葉の例に「ら抜き言葉」を挙げている。前者は「現時点では認知しかねるとすべきであろう」と述べ、後者は「非難を受けながらも、現在ではかなり広く広まっている」(p.135)と述べている。このように、言葉に規範を求める立場では、表現の「ゆれ」は、誤用や乱れとされる。

第20期国語審議会(1995)は、「ら抜き言葉」を誤用として捉えているが、同報告において、「読まなすぎる」「読まなさすぎる」などの「助動詞「ない」+すぎる」と「助動詞「ない」+さ+すぎる」(以下、本稿では「な過ぎ」「なさ過ぎ」と呼ぶ。「過ぎ」と記すが、「すぎ」も含むものとする。)は、「その適否の判断は個人の語感によるところが大きく、(中略)どの程度まで認めていくかの判断が難しい」と記されている。つまり、「な過ぎ」「なさ過ぎ」は、誤用や乱れとして扱われず、「ゆれ」として認識されていると言える。

本稿では、野田(2005)の定義を踏襲し、更に、「な過ぎ」と「なさ過ぎ」は「ゆれ」の状態にあると考える。そして、これらがどのような割合で使用されているかを調査することで、「な過ぎ」「なさ過ぎ」を一例として、「ゆれ」の状態とは、どのような使用状態なのかを提示することを研究の目的とする。

第二章 「過ぎ」の先行研究

第一節 国語辞典における意味記述

研究対象を明確にするため、以下、『明鏡国語辞典 第二版』⁽⁴⁾を引用する。

《動詞の連用形について》その程度が度を超している意の名詞を作る。「飲み一・太り一・働き一・喜び一」(p. 898)

〈動詞の連用形・形容詞・形容動詞の語幹などに付いて複合語を作る〉物事がある程度をこえる。度をこえる。「働き一・喜び一・みじか一・多一・静か一・危険一」「自信がなさ一」「あまりにも情けなさ一」「ぎこちな(さ)一」「人の意見を聴かな一」【語法】「…ない」に続くときは、語によって「なさすぎる」「なすぎる」の形になる。「情けない→情けなさすぎる」「つまらない→つまらなさすぎる」(p. 900)

「過ぎ」には、「飲み過ぎだ」「太り過ぎだ」のような名詞、「働き過ぎる」「喜び過ぎる」のような動詞がある。つまり、本稿が取り上げる「な過ぎ」「なさ過ぎ」にも「飲まな(さ)過ぎだ」「太らな(さ)過ぎだ」のような名詞と、「働かな(さ)過ぎる」「喜ばな(さ)過ぎる」のような動詞があることになる。

第二節 「過ぎる」の先行研究

統語的に「V-すぎる」を分析しているものには、影山(1993)⁽⁵⁾、由本(1997)⁽⁶⁾などがある。いずれも、「どのような動詞も「過ぎる」と結合することができ」(由本1997: 105)ることを指摘している。また、複合動詞についてまとめている姫野(2018)⁽⁷⁾も、「他の後項動詞と違って、形容詞、形容動詞、副詞、「である」等と結合する。これは、大きな特徴である」(p. 34)と述べている。このように、「過ぎ」は接合する語に限定を設けないものであり、それゆえに、「な過ぎ」「なさ過ぎ」の両者が許容され得るのだと考えることができる。

「過ぎる」が接合する語を品詞ごとに分析したものに、中村(2005)⁽⁸⁾がある。中村(2005)は、「青空文庫」を利用し、25人の作家の214作品から1,068例の複合動詞「すぎる」の用例を抽出し、分析している。その中で、「補助用言「すぎる」が接続する要素が「…ない」の形で終わる場合、「～なすぎる」という形と「～なさすぎる」という形が観察される。」(p. 173)と述べ、次のような3点を記している。

1) 存在を表す「ある」の反意語に相当する否定の「ない」に関しては「なさすぎる」という活用

になり、そのような例しか見つからない (p. 173)

2) 否定の形態素「ない」が他の要素に接続する場合や「～ない」の形に否定的な意味が感じられる場合、換言すると、「ない」という形態素に分析できる場合は、「…なさすぎる」となる (p. 173)

3) 動詞に「ない」が接続し、それに「すぎる」が接続する場合は (略)「飲まな過ぎる」と「飲まなさすぎる」の両方が許容されるようである。(p. 174)

ただし、3) に関しては、「採集した用例の中に「動詞+ない+すぎる」のパターンは3つ見つかったが、それらはすべて「～なさすぎる」の形だった」(p. 174)と記されており、「なさ過ぎる」の例は、収集されていない。

第三節 「なさそう」の先行研究

「なさ過ぎ」のように、否定の接辞「ない」が「なさ」となるものには、助動詞「そうだ」との接続がある。上述した『明鏡国語辞典 第二版』も「ない」のコラムに「[「そうだ」「すぎる」との接続]⁹⁾として、「なさそうだ」「なさすぎる」をまとめて、解説している。『明鏡国語辞典』の解説を表にまとめると以下ようになる。

表1 『明鏡国語辞典』

「ない」の種類	「さ」の介在	例文
① 形容詞「ない」	○	試合はなさそうだ お金になさすぎる
② 補助形容詞「ない」	○	悪くなさそうな味だ 彼の話は面白くなさすぎる
③ ①②の「ない」がついた形容詞	○	頼りなさそうに見える 情けなすぎて呆れる
④ 接尾語「ない」がついた形容詞	×	ごちな(さ)そうだ 切な(さ)そうだ あどけな(さ)すぎる はしたな(さ)すぎる
⑤ 助動詞「ない」がついたもの	×	彼は知らなさそうだ 彼は飽き足りなさそうだ 本を読まなすぎる くだらなさすぎる番組

「ない」が①形容詞、②補助動詞、③「…ない」の形容詞の場合は「さ」を介在するが、④接尾語、⑤助動詞の「ない」の場合は「さ」を介在しない。ただし、④は「慣用で「さ」を介在して使うものもある」、⑤は「「さ」を介在した形でも用いられるが、慣用になじまない」とある。つまり、④では例外的に「なさそう」「なさ過ぎ」を用いるものもあるが、⑤の「なさそう」「なさ過ぎ」は乱れとして捉えられていると言える。

澤田 (2009)¹⁰⁾も「な(さ)過ぎ」と同時に「な(さ)そう」について調査を行っている。澤田 (2009)は、「さ」を「余剰的接尾辞」と名付け、「なさすぎる」「なさそうだ」の使用状況を「現代

日本語書き言葉均衡コーパス」及び新聞記事を用いて調査し、8,073例の余剰的接尾辞「さ」を収集し分析している。そして、文体がフォーマルでないほうが「さ」が介在されやすいこと、現代新聞記事のほうが戦前新聞記事よりも「さ」が介在されやすいことを提示している。

上記のような先行研究の結果から「な(さ)過ぎ」も「な(さ)そう」と同じような使用割合になると想定し、「な(さ)そう」についても先行研究をまとめることにする。

まず、1955年に国立国語研究所が行った「語形確定のための基礎調査」⁽¹¹⁾がある。この調査には、「知らなそう」と「知らなさそう」に関し、どちらが良いかの理由を選択肢から選ばせる意識調査がある。結果は次のように記されている。

A 知らなそう B 知らなさそう 回答者 60

[採る形] B形が多数

[理由] B形— 一般的20%, 本来の形17%, 言いやすい13%, 規範に合う10% (言にくい30%) A形— 言いやすい22%, 一般的18%, 本来の形17%, 語感が良い(「本来の形」, 「くずれた形」《A形・B形に》, 「言いやすい」, 「言にくい」の多く出たことが特徴的。)

国立国語研究所 (1956: 81)

この調査では、助動詞「ない」に「そう」が付く場合、A「知らなそう」が本来の形であるのにも関わらず、「知らなそう」だけではなく、「知らなさそう」も「本来の形」であると認識している人が多く、「問題をはらんだ語である」(P. 81)とまとめられている。

渡辺(1964)⁽¹²⁾は、「良い」「無い」は規則通りであれば、「良そうだ」「無そうだ」となるはずが「良さそうだ」「無さそうだ」となるのは、「一音節語幹への補強挿入」(p. 17)の可能性があるとする。そして、「気持ちよ(さ)そうだ」「住みよ(さ)そうな家」「なさけな(さ)そうだ」「くだらな(さ)そうな本」を挙げ、「さ」を入れるか否かは、「人により時によって差がありそうである」(p. 18)と述べている。

文化庁(1995)⁽¹³⁾は、助動詞「そうだ」の接続について、「ク活用の形容詞で、語幹が一音節である「よい」「ない」に付く場合に限っては、「よさそうだ」「なさそうだ」のように、間に「さ」を入れるのが普通の言い方である。」「動詞に打ち消しの助動詞「ない」の付いたものに「そうだ」が接続する場合は、知らなそうだ 打てなそうだ のように、間に「さ」を入れないのが普通の言い方である」(p. 555)と述べている。

豊田(1998)⁽¹⁴⁾は、「なさそうだ」「そうにない」「そうではない」について、新聞、小説の用例および日本人の用法調査から考察を行っている。そして、「眼前の様子が強調される場合には」(p. 71)「そうにない」よりも「な(さ)そう」が使われるとしている。しかし、「なそう」と「なさそう」の使い分けについては、調査の結果からは明らかにされていない。

第四節 「な（さ）そう」の地域差

真田（1983）⁽¹⁵⁾は、ゆれている表現をいくつか提示し、その地域差に注目しながら、「地域的な差が濃厚に認められる以上、正しい正しくないといった議論においても（中略）それぞれの形式の地域的な性格を無視して進めることはできない」（p. 102）と主張している。

「な過ぎ」「なさ過ぎ」に関しては、地域差を考慮した調査は行われていないが、「なそうだ」「なさそうだ」に関しては、野田（2003）とNHK放送文化研究所（2015）が調査を行っている。

野田（2003）⁽¹⁶⁾は、全国4地域の若年層にアンケート調査を行い、「なそうだ」と「なさそうだ」の選択傾向調査を行っている。その結果では、形容詞に付く場合は、近畿だけが「なさそうだ」の選択率が高く、動詞に付く場合は「なさそうだ」の選択率は、東北がやや低く、近畿、九州が比較的高い傾向にあり、また、「なそうだ」の選択率は、近畿だけがかなり低かったと述べている。

NHK放送文化研究所の「日本語のゆれに関する調査」⁽¹⁷⁾で得た回答を塩田（2016）⁽¹⁸⁾は、回答者の属性差から、「やらの（さ）そうだ」「つまらの（さ）そうだ」では、「[[やらのなさそうだ]「つまらのなさそうだ」のみ○]という回答は、西日本で特に多」（p. 30）だったと述べている。塩田（2016）の結果を表で提示する。

表2 塩田（2016）

	北海道	東北	関東	甲信越	東海	北陸	関西	中国	四国	九州沖縄	平均
やらのなさそうだ (%)	48	26	37	42	60	62	72	58	73	52	50
つまらのなさそうだ (%)	38	13	24	23	43	59	63	64	68	54	40

表2の数値は「なそうだ」は「おかしい」、「なさそうだ」は「おかしくない」と回答した人の割合である。「やらのなさそうだ」は全国平均50%、「つまらのなさそうだ」は全国平均40%である。この結果から、「なさそう」の選択率は、東北地方が低く、四国および関西地方が高いことが分かる。

以上の野田（2003）と塩田（2016）の結果から、本稿では、東北地方と関西地方に焦点を当てることにする。

第三章 「な（さ）過ぎ」の調査

第一節 調査1「国会会議録」

国会議員は、選挙区選挙等によって選ばれているため、国会での日本語は、一地方のものではなく、日本全体の言語使用の縮図になっている。このように判断し、国会会議録を資料とすることとした。また、澤田（2009）が文体によって「な過ぎ」と「なさ過ぎ」の選択に差があることを指摘していることから、本稿では、会議録は文体がフォーマルであり、「さ」が介在されにくいと考え

たうえて、あえて、会議録に見られる「な過ぎ」「なさ過ぎ」の使用を調べることにした。また、戦前と現代とでは、「な過ぎ」「なさ過ぎ」の使用傾向に違いがあるという指摘に従い、本稿の調査期間は、平成に限定した。ただし、平成元年と平成31年は、昭和および令和にまたがっているため、平成2年（1990年）から平成30年（2018年）を対象期間とする。更に、衆議院、参議院の両院の通常国会のみを対象とした。国会会期は28回、平均期間168.6日間、最長245日間、最短135日間である。用例の収集には、「国会会議録検索システム」⁽¹⁹⁾を利用した。検索語は、「なさ過ぎ」「なさすぎ」「な過ぎ」「なすぎ」とした。用例には、(1)のように判定詞が後続する名詞のもの、(2)のように複合動詞となっているものの両者を含める。(1)(2)は国会会議録から収集した「なさ過ぎ」の例である。以下、本稿の例文は収集した用例の中から提示する。

- (1) それは余りにも実態を見なさ過ぎだと思えますよ。
- (2) 逆に余りに目立たなさ過ぎる。
- (3) (4) 以下のような例は、研究対象ではないため、除外した。
- (3) そんな過ぎることなく襲撃を受けた可能性は非常に高いと思われます。
- (4) ちょっとかたくな過ぎたかなというふうなことになる側面も必要だろうと思うんです。
- (4) は、「頑なだ」というナ形容詞に「過ぎる」が後続しており、「な」は否定「ない」の一部ではないため、対象外となる。

『明鏡国語辞典』の分類を参考に「な（さ）過ぎ」を以下のようにA、B、C、Dに4分類する。

- | | |
|------------------|--------------------|
| A V-ない+過ぎ | B 否定「ない」が付いた形容詞+過ぎ |
| C 「ある」の否定「ない」+過ぎ | D 名詞・ナ形容詞の否定+過ぎ |

- (5) (6) はA、(7) はC、(8) (9) はDの例である。
- (5) 国会での審議がやられな過ぎますよ。
- (6) どうも日本は人権人権というときに、被害者の人権を考えなさ過ぎる。
- (7) その認識が余りにも私はなさ過ぎると。
- (8) そこまで社会にあるいはボランティアに求めることは過度ではなさ過ぎるのかと
- (9) 先ほど余りにも大胆でなさ過ぎると言われましたが

「やられな過ぎます」「考えなさ過ぎる」は、動詞「やる」「考える」の否定形に「過ぎ」が付いたものであるためAに、「認識がなさ過ぎる」は、「ある」の否定「ない」に「過ぎ」が付いたものであるためCに、「過度ではなさ過ぎる」は名詞「過度」の否定「過度ではない」に「過ぎる」が付いたもの、「大胆でなさ過ぎる」はナ形容詞「大胆だ」の否定「大胆でない」に「過ぎる」が付いたものであるため、どちらもDとなる。

Bに関しては、研究対象を明確にする必要がある。まず、「ない」を含む形容詞には、3種ある。一つ目は、形容詞の一部として「ない」はあるが、否定の「ない」とは無関係のものである。

- (10) ともかく金額的に少な過ぎる。

「少ない」や「危ない」は、「少」「危」と「ない」を切り離すことができない。このような「ない」は否定を表さないため、Bから除外する。

二つ目は、「意味を強める接尾語」(『明鏡国語辞典』p.960)の「ない」が付いたものである。

(11) 幾ら何でもせわしな過ぎる

例えば、「せわしない」は、「せわしい」の否定ではなく、「せわしい」に意味を強める「ない」が後続したものである。同様のものには「えげつない」がある。この「ない」も否定の意を表さないためBからは除外する。

ただし、「少ない」「危ない」「せわしない」「えげつない」にも、「な(さ)過ぎ」の用例があったため、4分類とは別に言及する。

Bに含まれる否定「ない」が付いた形容詞には、「もったいない」「だらしがない」「情けない」がある。これらは、「もったいいける」「だらしがない」「情けがない」があるように「ない」の前後で区切りをつけることができる。また、「ない」も否定を含意するため、研究対象のBとする。

収集したA, B, C, Dの合計は、「な過ぎ」が90, 「な(さ)過ぎ」が344であった。結果をグラフ1に示す。



グラフ1 国会会議録「な(さ)過ぎ」

Aは、「な過ぎ」が88, 「な(さ)過ぎ」が90あった。Bは、「な過ぎ」が2, 「な(さ)過ぎ」が8であった。C, Dは「な(さ)過ぎ」のみであった。C, Dに「な過ぎ」「な(さ)過ぎ」にゆれがないという結果は、中村(2005), 澤田(2009)が示す結果と同じである。

第二節 「国会会議録」における「V-ない+過ぎ」「A-ない+過ぎ」

「V-ない+過ぎ」のVを表にまとめる。

表3 国会会議録「V-な(さ)過ぎ」

用例数	な過ぎ (用例数)	な(さ)過ぎ (用例数)
10以上	知ら- (33) 足り- (23)	し- (19) 知ら- (14)
5以上		足り- (6) V-てい- (5)
3以上	足ら- (3) やら- (3)	考え- (4) 言わ- (4) V-れ- (受身) (4) 足ら- (3)

2	合わ- 切ら- 出さ- わから- V-れ- (受身)	起こら- 教え- 怖がら- 出- 見え- やら
1	当たら- いか- 掛け- 考え- 聞か- させ- 騒が- 使わ- V-てい- 出な- 通ら- とら- 取り組ま- なら- 払わ- 持た-	変え- かか- かけ- 語ら- きかせ- 決め- 縛ら- 使わ- 着け- とれ- 入ら- 働か- 払わ- ふえ- 見- 目立た- 用い- 行き届か- わから-

「な過ぎ」で多かったのは、「知らな過ぎ」「足りな過ぎ」であった。

(12) 実態を知らなすぎます。

(13) お金の問題というよりも人手が足りな過ぎるというお話をよく聞きます。

「知らなさ過ぎ」「足りなさ過ぎ」も「な過ぎ」ほどではなかったが、出現数は他の動詞に比べ多かった。

(14) 実態を余りにも知らなさ過ぎるのではないのか。

(15) 外交官の数が足りなさ過ぎます。

「知る」「足りる」の出現数が多いのは、会議録という資料の性質に関係していると思われる。ただし、「知らな過ぎ」が33、「知らなさ過ぎ」が14、「足りな過ぎ」が23、「足りなさ過ぎ」が6であり、「な過ぎ」のほうが「なさ過ぎ」よりも多い点には注目したい。

また、「なさ過ぎ」では、「しなさ過ぎ」が多かった。ただし、この「しなさ過ぎ」には、スル動詞等も含めている。

(16) 基本的なことを勉強しなさ過ぎるように私は思っています。

以上をまとめると、「な過ぎ」「なさ過ぎ」のいずれでも「知る」「足りる」に後続する例が多く、「なさ過ぎ」では「する」に後続する例が多かったということになる。

Bの結果をまとめると、表の通りになる。

表4 国会会議録「A-な(さ)過ぎ」

用例数	な過ぎ	なさ過ぎ
3		情け- もったい-
2	もったい-	だらし-

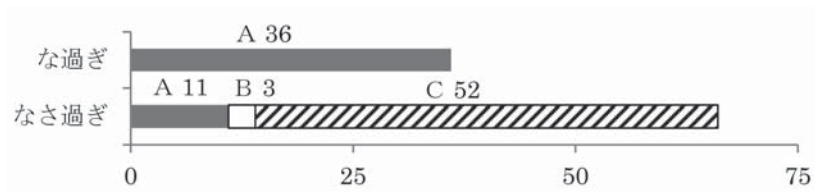
収集できた用例数が少ないため、結論は出せないが、「もったいない」に限れば、「な過ぎ」が2、「なさ過ぎ」が3であり、ゆれている可能性は見い出せる。

第三節 調査2「県会議録」

先行研究の結果から、「な過ぎ」は東日本に多く、「なさ過ぎ」は西日本に多いと想定し、東日本の代表として東北地方の県議会会議録⁽²⁰⁾、西日本の代表として関西地方の府・県議会会議録⁽²¹⁾を

資料とする。東北地方は、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県の6県、関西地方は大阪府、京都府、兵庫県、滋賀県、奈良県、和歌山県の2府4県とする。調査対象は調査1同様、平成2年から平成30年を基本とするが、府県によって、公開されている資料の年や種類は異なっている。本研究で利用する資料は、2019年11月18日現在公開されている定例会、臨時会、委員会の会議録とする。

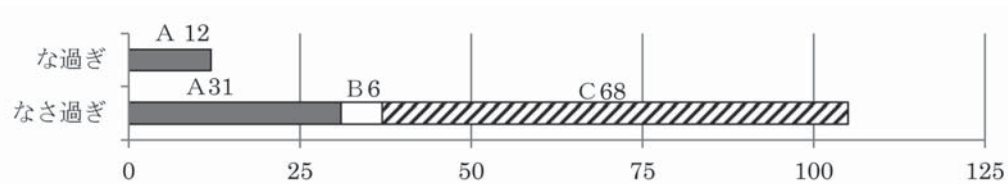
東北地方の結果をグラフ2に示す。収集したA, B, C, Dの合計は、「な過ぎ」が36, 「なさ過ぎ」が66であった。数値は出現数である。



グラフ2 東北地方

Dは「な過ぎ」「なさ過ぎ」のいずれにも出現がなかった。C「『ある』の否定『ない』+過ぎ」はすべて「なさ過ぎ」であり、調査1と同じ結果となった。Aは、「な過ぎ」が36, 「なさ過ぎ」が11あった。Bは、「なさ過ぎ」が3であった。

関西地方の結果を以下に示す。収集したA, B, C, Dの合計は、「な過ぎ」が12, 「なさ過ぎ」が105であった。結果をグラフ3に示す。

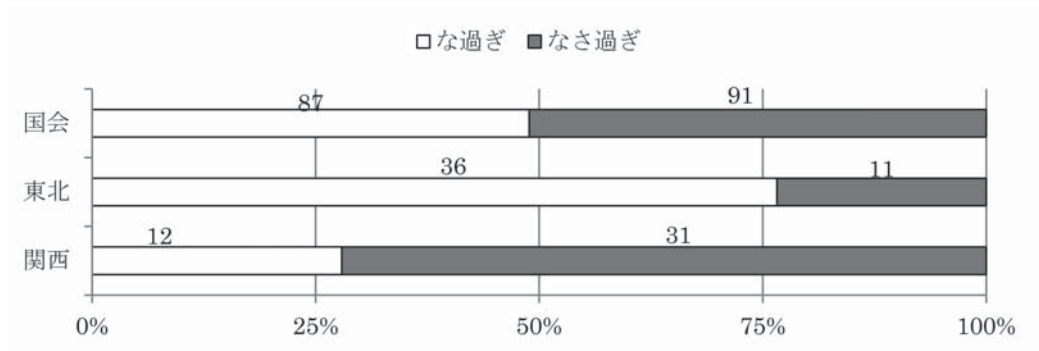


グラフ3 関西地方

東北地方と同様に, Dは「な過ぎ」「なさ過ぎ」のいずれにも出現がなく, Cはすべて「なさ過ぎ」であった。Aは、「な過ぎ」が12, 「なさ過ぎ」が31あった。Bは、「なさ過ぎ」が6であった。

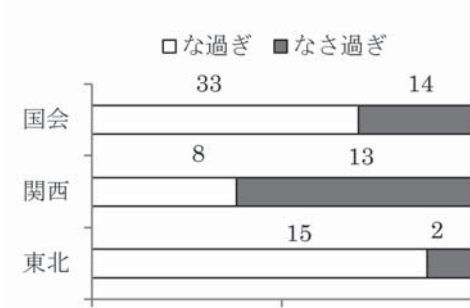
第四節 「県会会議録」における「V-ない+過ぎ」「A-ない+過ぎ」

A「V-ない+過ぎ」の結果を調査1・2でまとめると、グラフ4になる。

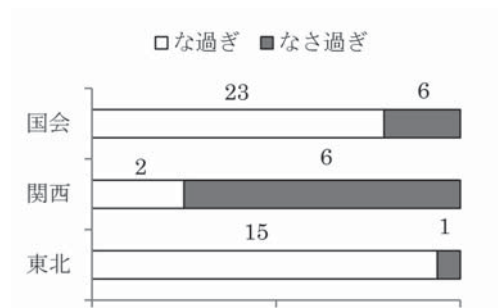


グラフ4 「な(さ)過ぎ」のまとめ

国会会議録では「な過ぎ」「なさ過ぎ」が50%程度で出現数が拮抗している。これに対し、東北地方では「な過ぎ」が約76%であるのに対し、関西地方では約28%となっている。



グラフ5 「知ら-」



グラフ6 「足り-」

グラフ5, 6は、動詞「知る」「足りる」に限定して出現数をまとめたものである。ここから関西地方では「知らな過ぎ」よりも「知らなさ過ぎ」, 「足りな過ぎ」よりも「足りなさ過ぎ」の出現が多く、東北地方では、その反対となっていることが分かる。国会と東北地方を比較しても、国会のほうが東北地方よりも「なさ過ぎ」の出現割合が多いと言える。

また、国会会議録では、「しなさ過ぎ」の例が19あったが、東北地方では3、関西地方では2であった。例としては、次のようなものである。

(17) 政策の効果を期待しなさ過ぎるものではないでしょうか。(関西)

いずれの地方でも、「しな過ぎ」の用例はなかった。つまり、国会、東北地方、関西地方では、「しな過ぎ」ではなく「しなさ過ぎ」が選択されているということになる。これに関しても、用例が少ないため、今後の課題としたい。

B「否定「ない」が付いた形容詞+過ぎ」の結果をまとめると、表5,表6のようになる。表6は、「なさ過ぎ」の用例をまとめたものである。

表5 「A-な(さ)過ぎ」用例数

用例数	国会	東北	関西
な過ぎ	2	0	0
なさ過ぎ	8	3	3
合計	10	3	3

表6 「A-なさ過ぎ」

用例数	国会	東北	関西
3	情け- もったい-		
2	だらし-		もったい- だらし-
1		さりげ- 情け- もったい-	

国会、東北地方、関西地方のいずれでも用例があったのが「もったいなさ過ぎ」であった。

(18) 余りにも今の時代にはもったいなさ過ぎると。(東北地方)

このほかの用例としては、「さりげなさ過ぎ」「だらしなさ過ぎ」「情けなさ過ぎ」があった。用例数が少ないため、結論は出せないが、「V-ない+過ぎ」とは異なり、関西地方だけでなく、東北地方およびの会議録にも、「な過ぎ」の用例はなく、「なさ過ぎ」の使用のみ確認できた。今後、データを増やすなどして、用例を集め、「な過ぎ」「なさ過ぎ」の使用傾向を明らかにしたい。

第五節 否定ではない「ない」を含む形容詞

上述の通り、「ない」を含む形容詞には、「ない」が否定を含意しないものがある。例えば、「少ない」「危ない」「せわしない」「えげつない」である。これらの用例の中で、最も出現数が多かったのは「少な過ぎ」である。国会会議録では910、東北県地方の議会会議録では178、関西地方の府・県議会会議録では307あった。このほかでは、国会会議録に「危なさ過ぎ」が3、「えげつなさ過ぎ」「せわしなさ過ぎ」はそれぞれ1あったが、東北地方、関西地方では用例は収集できなかった。これらは「な過ぎ」での出現が主であったが、「少な過ぎ」も国会議事録で2、東北地方で1例見られた。

(19) しかも仙台圏と地方都市との交流が少な過ぎます。(東北)

この「少な過ぎ」に関しては、中村(2005)⁽²²⁾も、島崎藤村『夜明け前』に「へえ、おれは自分じゃ、夢がすくな過ぎると思うんだが」という例があることを報告している。「な(さ)過ぎ」ではないが、加藤・吉田(2004)⁽²³⁾には、「「少なさそうだと「少なそうだ」ではどちらが正しい形か、理由とともに述べなさい」(p. 85)、文化庁(1995)⁽²⁴⁾には、「[問]「少なそうだ」「少なさそうだ」、あるいは「知らなそうだ」と「知らなさそうだ」という言い方は、それぞれ、どちらが正しいか」という問いが挙げられ、いずれも「少なそうだ」が正しい(加藤・吉田2004:88)と解説されている。

「少な過ぎ」は、「少な過ぎ」「少なさ過ぎ」の総数のうち、国会会議録で0.2%、東北地方の議会会議録で0.5%の出現率となっており、言い間違いの範囲であると捉えられる。このような

誤用が生じるのは、「少ない」の「ない」を「もったいない」「だらしない」「情けない」の否定の「ない」と混同するためであると考えられる。

第六節 調査1・調査2のまとめ

調査1では国会会議録から「な過ぎ」「なさ過ぎ」の用例を収集した。結果、A「V-ない+過ぎ」およびB「否定「ない」が付いた形容詞+過ぎ」には、「ゆれ」が見られるのに対し、C「「ある」の否定「ない」+過ぎ」、D「名詞・ナ形容詞の否定+過ぎ」には、「ゆれ」が見られないことが分かった。また、「V-ない+過ぎ」では、「な過ぎ」と「なさ過ぎ」の出現数は拮抗していた。調査2では、東北地方の県議会会議録と関西地方の府・県議会会議録から用例を収集した。その結果、東北地方では「な過ぎ」が「なさ過ぎ」よりも出現数が多いのに対し、関西地方では「なさ過ぎ」のほうが「な過ぎ」よりも出現数が多かった。用例が多い「知る」「足りる」に限定して、「V-な過ぎ」「V-なさ過ぎ」の出現数を比較しても、東北では「V-な過ぎ」、関西では「V-なさ過ぎ」のほうが出現数が多いという結果となった。

また、用例数が少ないため、結論は出せないが、今回の調査では、「否定「ない」が付いた形容詞+過ぎ」および「する+ない+過ぎ」では、「な過ぎ」よりも「なさ過ぎ」の用例のほうが多かった。つまり、「知らな(さ)過ぎる」「足りな(さ)過ぎる」とは異なり、形容詞や一部の動詞には、「ゆれ」に地域差がない可能性が考えられる。

第四章 おわりに

本稿の調査で明らかになったことをまとめる。「な過ぎ」「なさ過ぎ」を4分類する。

A「V-ない+過ぎ」

「な過ぎ」「なさ過ぎ」で「ゆれ」がある。国会会議録、東北地方の県議会会議録、関西地方の県議会会議録のいずれでも、「な過ぎ」「なさ過ぎ」の出現が認められた。ただし、国会会議録では「な過ぎ」「なさ過ぎ」の出現数が拮抗していたのに対し、東北地方では「な過ぎ」のほうが多く、関西地方では「なさ過ぎ」のほうが多かった。つまり、「な過ぎ」「なさ過ぎ」のゆれには、地域差があると言える。

B「否定「ない」が付いた形容詞+過ぎ」

「な過ぎ」「なさ過ぎ」のいずれも収集できた用例が少なかった。特に、東北地方および関西地方の県議会会議録では「な過ぎ」の用例を収集することができなかった。「なさ過ぎ」は、数は少ないものの、国会議事録、東北および関西地方の県議会会議録から用例を収集することができた。ゆれの地域差については、今後の課題としたい。

C 「「ある」の否定「ない」+過ぎ」

「なさ過ぎ」となる。「な過ぎ」「なさ過ぎ」のゆれはない。

D 「名詞・ナ形容詞の否定+過ぎ」

収集できた用例が非常に少なかった。「な過ぎ」「なさ過ぎ」を用いた複合語になりにくいと考えられる。

このほか、「本来の語形、意味・用法が大多数に支持され安定しているとき、新たに別語形等を用いることは、誤用とされる」⁽²⁵⁾ という定義から誤用に分類されるものに、「少な過ぎ」があり、少数ではあったが用例を収集することはできた。

本稿で取り上げたのは、平成の時代、フォーマルな文体を用いている国会会議録、府・県議会会議録である。今後は、東北地方、関西地方に限定せず、日本国内の県議会会議録を調査し、東日本では「なそう」、西日本では「なさそう」が選択されやすいという傾向が「な過ぎ」「なさ過ぎ」でも同じであるのかを詳細に調べていく予定である。特に、今回用例が少なかった「否定「ない」が付いた形容詞+過ぎ」の地域差について、「V-ない+過ぎ」と比較しながら、その傾向を明らかにしたいと考えている。

注

- (1) 「ののちゃんのDO科学 大人になると骨の数は変わる？」『朝日新聞』2017年2月4日 朝刊 p. 5.
- (2) 第20期国語審議会「新しい時代に応じた国語施策について（審議経過報告）」
(http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/index.html)
(2019.08.29 確認)
- (3) 野田春美「ゆれていることば」『ケーススタディ 日本語のバラエティ』おうふう 2005.10 pp. 134-139.
- (4) 北原保雄（編）『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店 2010.12 pp. 899-900.
- (5) 影山太郎『文法と語構成』ひつじ書房 1993.10 p. 153.
- (6) 由本陽子「動詞から動詞を作る」第2章『語構成の概念構造』影山太郎・由本陽子 研究社出版 pp. 53-127.
- (7) 姫野昌子『新版 複合動詞の構造と意味用法』研究社 2018.5 pp. 34-35.
- (8) 中村嗣郎「「すぎる」構文—書き言葉における事例の分析—」『コミュニケーション科学』22号 東京経済大学コミュニケーション学会 2005.3 pp. 139-177.
- (9) 北原保雄（編）『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店 2010.12 p. 1280.
- (10) 澤田久美子「—「なさすぎ」などにみられる剩余的な要素「さ」—「さ」の使用における揺れについて—」愛知教育大学平成20年度修士論文抄録 2009
(<http://hdl.handle.net/10424/1410>) (2019.08.29 確認)
- (11) 国立国語研究所『国立国語研究所年報 7』秀英出版 1957 pp. 76-91.
(https://www.ninjal.ac.jp/d_data/bs/10600/460/1/N007.pdf) (2019.08.29 確認)
- (12) 渡辺実「よさそうだ・なさそうだ」『ゆれている文法』口語文法講座3 時枝誠記・遠藤嘉基（監修）明治書院 1964.11 pp. 13-22
- (13) 文化庁（編）『言葉に関する問答集 総集編』全国官報販売協同組合 1995.3 pp. 555-556.
- (14) 豊田豊子「「そうだ」の否定形」『日本語教育』97号 日本語教育学会 1998.7 pp. 60-71.
- (15) 真田信司『日本語のゆれ』叢書・ことばの世界 南雲堂 1983.11 pp. 85-102.

- (16) 野田春美「様態の「そうだ」の否定形の選択傾向」『日本語文法』3巻2号 日本語文法学会 pp. 131-145.
- (17) 山下洋子・井上裕之「“パンダはお亡くなりになりました”はおかしいですか?—2015年「日本語のゆれに関する調査」から①—」『放送と調査』NHK出版 2016.6
(https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/20160601_5.html) 〈2019.08.29 確認〉
- (18) 塩田雄大「“させていただきます”について書かせていただきます—2015年「日本語のゆれに関する調査」から②—」『放送と調査』NHK出版 2016.9
(https://www.nhk.or.jp/bunken/research/kotoba/pdf/20160901_7.pdf) 〈2019.08.29 確認〉
- (19) 国会会議録検索システム (<http://kokkai.ndl.go.jp/>) 〈2019.08.29 確認〉
- (20) 東北地方の用例の収集には、各県の検索システムを利用した。
青森県議会 (<http://www.pref.aomori.dbsr.jp/index.php/>)
岩手県議会 (<http://www3.pref.iwate.jp/gikai/user/www/>)
宮城県議会 (<https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefmiyagi/SpTop.html>)
秋田県議会 (<https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefakita/SpTop.html>)
山形県議会 (<https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefyamagata/SpTop.html>)
福島県議会 (<https://ssp.kaigiroku.net/tenant/fukushima/SpTop.html>)
〈2019.08.29 確認〉
- (21) 関西地方の用例の収集には、各府県の検索システム以下を利用した。
大阪府議会 (<https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefosaka/pg/index.html>)
京都府議会 (<http://www.pref.kyoto.dbsr.jp/index.php/>)
兵庫県議会 (<http://www.kensakusystem.jp/hyogopref/index.html>)
滋賀県議会 (https://www.shigaken-gikai.jp/voices/g08v_search.asp)
奈良県議会 (<https://ssp.kaigiroku.net/tenant/prefnara/pg/index.html>)
和歌山県議会 (<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/200100/www/html/gijiroku/menu.html>)
〈2019.08.29 確認〉
- それぞれの検索システムを使用したか、和歌山県に関しては、用例の抽出が困難であったため、会議録を閲覧し、手作業で用例を収集した。
- (22) (注8 参照)
- (23) 加藤重弘・吉田朋彦『日本語を知るための51題』研究社 2004.12 pp. 85-88
- (24) (注12 参照)
- (25) 第20期国語審議会(1995)(注2 参照)

Variability of Word Choice: Usage Rate of “-NA SUGI” and “-NA SA SUGI”

Satoko KUROSAKI

Abstract

This research focuses on the variability of word choices in native Japanese. The compound word expressing negative excess, “SUGI,” takes two forms: “-NA SUGI” and “-NA SA SUGI.” This paper examines the usage rate of these phrases by leveraging the minutes of the National Diet of Japan and the prefectural assembly minutes of Tohoku and Kansai regions. Results show that both “-NA SUGI” and “-NA SA SUGI” are used in all contexts. However, there are differences of the usage rates. In the minutes of the National Diet, the number of appearances of “-NA SUGI” is nearly the same as the number of appearances of “-NA SA SUGI.” In contrast, “-NA SUGI” appears more often in the prefectural assembly minutes of Tohoku, while “-NA SA SUGI” appears more in the prefectural assembly minutes of Kansai. Thus, the usage rate of “-NA SUGI” or “-NA SA SUGI” differs regionally.

Key words: Compound Word, Variability of Word Choice, Regional Difference, Formal Expression, Negative Form